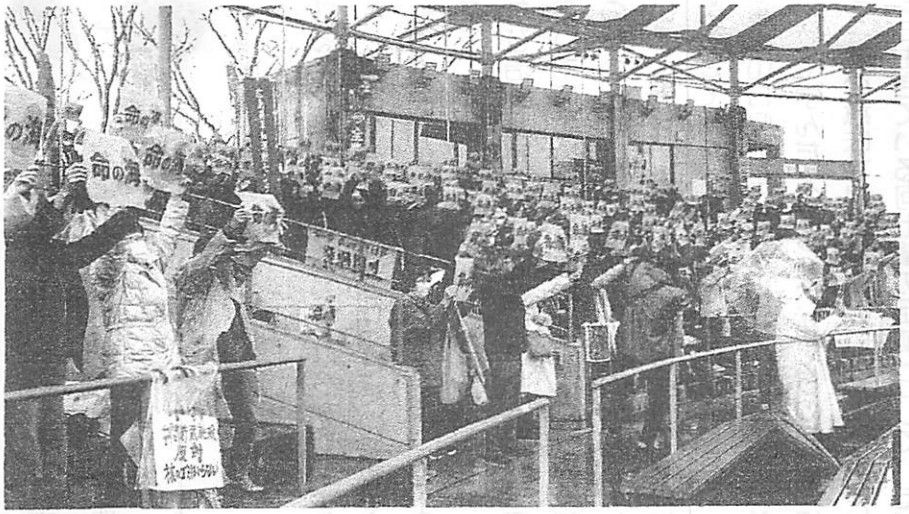
1989年5月8日第三種郵便物認可　2024年　4月15日　不屈　（毎月15日発行）No. 307

NO！原発も中間貯蔵施設も！



上関原発を建てさせない山口大集会

3月23日（土）山口・維新公園で開く

（写真は県内外から800人・雨をついて参加した皆さん）

不屈

山口県本部版
NO. 307

治安維持法犠牲者
国家賠償要求同盟
山口県本部
〒754-0004
山口市小郡金堀町
21番の1
林洋武方
電話＆FAX
083（972）3987

◇えん罪を晴らす最後の砦となっている『再審法』の改正を国に求める陳情書について田布施町3月議会は県下で初めて採択しました。国民救援会柳井支部が提出したもの。

◇2月県議会は3月15日閉会しました。今議会に提出された「自民党派閥の政治資金パーティー収入をめぐる裏金事件の真相解明と政治資金規正法の強化を求める意見書の採択を求める」ほか5件の請願はすべて不採択となりました。

◇日本共産党中央委員会政策委員長・山添拓参院議員が4月14日来県。5月26日投開票の周南市議選で共産党の3議席を勝ち取ろうと応援演説します。徳山保健センターで午後2時から。

◇今年、没後89周年になる田中サガヨの墓参り＆学習会は5月12日(日)下関市豊田町で行います。学習会講師は土井ケ浜遺跡・人類学ミュージアム松下孝幸館長。演題は『土井ケ浜遺跡から日本人のルーツと未来がみえる、未来を創る』です。詳細は後日お知らせします。

◇治安維持法で弾圧された山口県人のうち今号から河上肇（はじめ）について連載を始めます。（2～3面）執筆は加藤碩（ひろし）元日本共産党山口県委員長です。

◇今年の国賠同盟国会請願は5月15日（水）です。山口県から下関支部の江原満寿男氏が参加します。

◇同盟の請願署名は現在170筆です。

今も生きている河上肇の足跡

河上肇記念会全国世話人　加藤碩（ひろし）

はじめに

紹介する河上肇についての一文は今から二十年前に私が岩国市で行った「山口河上会総会」で行った話の概要です。この日の総会で「山口河上会」が京都市に事務局を置く「河上肇記念会」に合併しました。

このたび治安維持法国賠同盟山口県本部から河上肇についての紹介を書いてほしいという要望を受け、改めて稿を起こすより二十年前のものとはいえ河上肇の生誕の地で話をした内容が今でも生きていると考え、当時の話の中で筆者の個人にかかわる部分の一部を削除して紹介することにいたしました。

河上肇は山口県で生まれ、現在の山口大学の前身である旧制山口高等学校で学んだ人であり、私たちの会が大切にしていくべき先輩です。その意味で是非お読みいただきたいと思います。なお表題は「今も生きている河上肇の足跡」としていただきたいと思います。

なお河上肇について詳しく学びたい方は同氏の『自叙伝』『貧乏物語』『第二貧乏物語』をお読み下さい。また新日本新書『河上肇』（塩田庄兵衛著）は、生涯を広くつかめる名著です。

第一章　その1　思想家、求道家としての河上肇

河上肇の六十七年にわたる人生は、波乱万丈です。いろいろ知れば知るほどその魅力が光ります。人間としての魅力という点で、こんなに光彩を放って、深い魅力をたたえている人は、そうざらにはいないのではないかと思います。もちろん経済学者として一級の人でしたから、その理論的水準は、当然あるのですが、『自叙伝』を読んでみてもそこかしこに光る独特の魅力的なセンテンス、文才・文章力ですね。人を引き付けずにはおかない文章にほれ込む方が多いのではないかと思います。

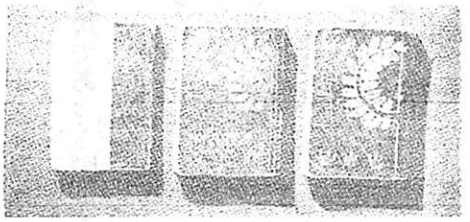
河上肇は、旧制の山口高等学校を卒業して東京大学に行くのですが、その時彼は最初は文学部を志望します。ところが高校の卒業前になって、志望を法科大学（法学部）に変えます。その当時、旧制の高等学校を卒業しますと、大学に行くことは、みやすかったようです。簡単な試験はあったのでしょうが、ほとんどの人が帝国大学に進学できた。

ところが河上肇は、文学部への進学を、一旦、高校側に提出した後、法学部に変更しますから、高校側もなかなかこの変更に同意しなかったようで、その意思は簡単には通りませんでしたしかし結局河上は自分がこうだとした結論は押し通しました。ここらあたりがまたこの人独特で、一つの魅力になっているのですが。

私はふっと思うのですが、河上肇が法学部に進学しないで、文学部に進んでその文才を輝かせていたら、おそらく夏目漱石や森鷗外に勝るとも劣らない文豪となり、相当な作品を世に出したのではないかと思ってみるのです。それほど文章に魅力があり、艶があると思います。

本日ここに『自叙伝』の初版本を持ってまいりました。

ただ戦後すぐの一九四六年の初版ですから、紙がもうボロボロになってしまっています。四冊からなっていますが、その三冊目は急に一、二冊目とは書き方が変わりまして、自分が本田弘蔵という別名の主人公として登場します。奥さんは重子となっていて、一種の小説的な手法で物語が展開します。そのあたりにも河上肇独特の一種茶目っ気を含んだ色気たっぷりの文章の展開があって面白いところです。そして主人公の本田弘蔵が戦前の激しい言論抑圧と天皇制軍国主義の日本で、のたうちまわるような苦闘の中で道を極めていく様子が描かれます。この一事にも垣間見ることができる通り河上肇は、思想家、求道家としての人間を強烈に感じるのです。こういう角度で、彼の経済学の著作を読んでみると、例えば後でお話をします『貧乏物語』に代表されるようにそこには河上独特の人間くさい経済思想が色濃く表れます。



３種類の装幀の『貧乏物語』初版本

今日の経済学者と言われる人々の多くは無機質な数字や係数を操作して、人間の暮らしむきや労働者の労働条件についての生きた分析をぬきにした「経済理論」を操ることを業としています。竹中平蔵という小泉内閣の経済財政大臣なんかは、その典型ですね。一応経済学者だと言われていますが、庶民の生活に思いを致さない経済学者というのは私はいかがなものかと思います。まさに河上肇は、こうした愚の骨頂のような「経済理論家」の対極に位置した人でした。河上経済学の根底には、人間としていかに生きるか、という思想、人間としての輝き、香気があると思うのですね。ただ、この「人道史観」とでもよぶべき理論には、マルクス経済学の陣営からも批判はあったのです。

日本共産党にようやく入党を許されたとき、河上は「地下に潜る」という状態で、他の人々との自由な交流も対話も許されない厳しい状況のもとにありましたが、入党の喜びを歌にしました。有名な一首で岩国の錦川のほとりの横山にある碑にも彫られているうたです。

たどりつき
ふりかへりみれば
やまかはをこえてはこえて
きつるものかな

この一首には、河上の求道家、思想家としての姿が実に見事に表現されていると思います。

（つづく）

私の戦争体験　北朝鮮の難民であった頃（4）林洋武

ソ連の戦車がやってくる

八月二〇日の午後わが家の前に「赤旗」や例の韓国の旗という小旗を持って人々が集まってきました。わが家の前は朝鮮半島を縦断する国道が通っていました。順安の街の一番北に位置して、国道側に板塀を築いていて節穴がありそこから国道を見ることができました。やがて、朝鮮人たちが一斉に「マンセイ」という声を上げ同時に「ウラー」と喚声を上げました。砂煙がもうもうとたつなか、大きな戦車が数台砲塔を少し揺らしながら入ってきました。日本軍の戦車の倍もある大きな戦車でした。戦車の上には兵隊たちが数人座って小銃を撃ちました。「バンバン」という音で喚声はいっそう大きくなりました。兵隊たちも戦車も今戦場から駆けつけたかのように泥だらけで兵隊たちの服装もぼろぼろでした。しかも持っている銃は「棒にお盆をくっつけた」ような奇妙な形をしていました。マンドリン銃とその後言われましたが自動小銃で一回引き金を聞くと数十発が出てくるという機関銃でした。つい一週間まで前には日本軍万歳といっていた人たちがソ連軍に「マンセイ」とか「ウラー」（ロシア語で万歳）とか叫ぶことに言いしれぬ怖さと不可解さがありました。私も「ほんとうに日本は負けたんだ」と実感しました。

保安隊がやってくる　安田さんが隊長だった。

それから二三日後、突如安田さんが数名のおつきを連れてわが家にやってきました。「今度順安に保安隊が組織されて私が隊長です。洪タイホといいます」「林家は在郷軍人会の会長ですので武装解除と家宅捜査をします。」と言い出しました。家中がかきまわされ日本刀二本とサーベル刀それに拳銃が並べられました。お金も全部畳の上に並べられました。母は敗戦とわかると毎日のように郵便局と金融組合に出かけて貯金を下ろしてきました。一回に下ろせるお金が制限されている中必死の形相で走り回っていました。そのお金が全部押収されました。安田さんとは父が昭和12年に日中戦争が始まると二度目の招集で兵隊に取られその留守を母が守るために雇った朝鮮の青年でした。日本語も上手で、まだ学齢前だった私の面倒もよく見てくれた人でした。太平洋戦争が始まると全体で人手不足で面事務所に勤めるようになりました。その安田さんが「洪（コウ）タイホ」となって保安隊の隊長になったのです。それから1年日本人の運命を決める絶対的の権力者になりました。母はそのお金は家族のすべてだと懇願しましたが100円札一枚残して「これが保安隊の給料だ」といいながら帰っていきました。（つづく）